

『演芸と映画』-舞台- 電子書籍 復刻版 ページ見本



“ 草 糸 絹 ”
(言 狂 月 十 場 舞 演 橋 新)

十月の新橋演舞場は曾我廻家五郎氏一座の新作狂言を以て蓋を開けました。出し物は第一に『無言』第二に『絹糸草』第三に『番馬方』第四『走馬燈』第五『寢臺車』で作者は例に依て座付きの一場漁人、一同車輪の大力演、却々の好評でありました。寫眞は第二の『絹糸草』で作者の宣傳には『手生けの鉢に植ゑ替へて又美しい草の色、夫れが矢張り浮草の、根も無い事を作り上げ、絹糸草と申上げた』と書いてあります。



□筆岡慎吉(五郎氏) 妻お糸(大磯氏) 村岡喜一郎(蝶六氏)

“春の土安”

(言狂月三場舞演橋新)

作氏鳥白宗正

天正九年二月の頃安土の城主織田信長が竹生島参詣に行つてゐる留守のひまに多くの侍女達打揃つてお寺詣りにまゐります。その
あつ侍女の若菜は豫て思ひを寄せてゐた村瀬新八といふ若侍と寄り添ひながら四方八方の語に耽つてゐると突然信長が馬を打たせて
歸つて來、二人の容子を見て唯だ一刀に斬つて捨て、更にその夜寺詣りから引戻された多くの侍女達と生命乞ひに附いて來た和尙
までも打首にしてしまひます。血腥い風の吹きすさんだ戦國時代、況して一徹短慮の信長が人の生命を生命と思はぬ性行が、文壇の
巨匠白鳥氏の筆と名優左團次が水際立つた演技とに依て遺憾なく現はされてゐます。



□織田信長（左團次氏）村瀬新八（猿之助氏）侍女若菜（芝鶴氏）旅人四郎兵衛（壽美藏氏）

“ 菊 吉 の 顔 合 せ ”

(六 月 の 歌 舞 伎 座)



市都第一の人氣役者ともいふべき菊五郎吉右衛門の兩氏が、時折の合同芝居は所謂『菊吉顔合せ劇』の名の下に満都の人心を集めるのであります。四月の本舞座は兩氏の顔合せで近來稀有の大入を續けましたが、此の六月にはいよいよ歌舞伎座の大舞臺で此の二名が技を競ふこととなりましたので、その評判は非常なもの。殊に菊五郎氏は新築後の歌舞伎座は初めての舞臺として意氣込みの程も素晴しく、演じ物は吉右衛門氏の『清正忠臣蔵』、菊五郎氏の『政奇聞御夜嵐』等で例に依て連日満員の盛況で御座いました。寫眞は同座稽古場の顔合せで右より菊五郎氏、吉右衛門氏、三津五郎氏、彦三郎氏であります。

“ 山 神 荒 ”

(言 狂 月 六 座 樂 邦)

神吉の長吉はその性極めて怯懦でありました。そのため亡父傳右衛門の時代から有つてゐた荒神山の盆割り、阿濃徳次郎一派の者に奪はれ、剩へ乾分加納屋利三郎まで殺されてしまひます。是を聞いた吉良の仁吉は三日前に結婚したばかりの女房おきくが阿濃徳次郎の妹であるところから、先づ女房を離縁し、清水次郎長の乾分大政小政等十八人と共に荒神山に押掛け阿濃徳及び門下助の一派と猛烈な闘ひを續けます。仁吉は門下助と斬り結んでゐる内に鐵砲を以て高殿を奪たれ終にそのまま死にましたが、大政小政は門下助を討ち果し荒神山の盆割を再び長吉の手に納めます。



「吉良の仁吉 澤田正二郎氏」 女房おきく 山路千枝子さん

“ ？ 者 役 化 道 ”

(言狂月八場劇國帝)

市の郵便局員杉森勇吉は官金二萬圓を預つてゐた爲めモグリの株屋に唆されて株に手を出し大損かしますので、カフェーの女黒田春枝と互ひに手を執り〇市に落ち延びホテルに隠れてをりましたが、春枝はもとく虚榮の強い女、ダイヤの指環や真珠の頸飾りが欲しい爲めに勇吉に金を出させたり同宿の或船長に媚を賣つたりしてをります。同じ泊り客の未亡人は色氣狂ひ、巧いことを言つて勇吉の心を亂します。頓て勇吉と春枝との間に痴話喧嘩が始まり、勇吉は春枝の咽喉を締めて田舎の山の中にある兄の許に走りまゐる。兄は無類の善人、所有の山林を抵償にして高利貸から金を借り弟の借金返済の罪を免れさせます。勇吉の本心は自覺めかけあらゆる慾望を捨て山中の自然の生活に浸らうと決心します。そこに死んだ筈の春枝が訪れて来て再び誘惑します。勇吉は應じません。すると今度は高利貸が木挽を連れてやつて來ます。勇吉は憤慨の餘り斧を揮つて高利貸を殺します。



○未亡人(初瀬浪子さん) 杉森勇吉(澤田正二郎氏) 黒田春枝(河村菊江さん)

“松 門 背 妹 樣 模 染”

(帝 國 劇 場 二 十 二 月 狂 言)



☒ 油屋の娘お染（律子さん）

“藏臣忠和昭”

(言狂月二十座鄉本)



妻おかる 水谷八重子さん

“ み よ ご 梅 ”

(言 狂 月 一 座 村 市)

吉原の女郎屋唐琴屋の倅丹次郎は悪番頭松兵衛の爲めに家が破産しました。色男の丹次郎には許嫁のお蝶の外に古くからの馴染藝妓で米八といふのがあります。隅田川の舟の中で丹次郎を見染めたのは辰巳藝者の仇吉です。折柄丹次郎は恩人千葉の半次郎の爲めに残月の茶入の行方を詮議してなります。盗んだ男は古島左文太といふ侍です。仇吉はそれを知つて色仕掛で茶入を取戻しそれと引換へに丹次郎への思ひを叶へやうと考へてなります。そこで米八と仇吉との間に戀の鞘當が始められます。深川生粋の意地づ張りの仇吉と吉原に育つて江戸前を背負つて立つた米八との間に猛烈な立廻りが始まらうとさへしましたがその場は千葉の藤兵衛の仲裁で納まりました。けれども容易に納まらぬ胸の仇吉は再び機を得て米八と喧嘩を始めます。然し命をかけての争ひも互ひに丹さんに盡す誠からと二人は綺麗に溶け合ひ、詮議の茶入も丹次郎の手に入つて八方芽出度く納まります。



「許嫁お蝶（水谷八重子さん） 唐琴屋丹次郎（訥子氏）」

A black and white photograph of a Peking Opera performer. The actor is wearing a highly ornate, beaded costume and an elaborate headpiece with a large, fluffy topknot. The face is painted with traditional Peking Opera makeup, featuring a white base and dark, stylized eyebrows. The actor is holding a fan in their right hand. The background is dark and out of focus.

南方支那へは旅行して、觀光の傍らにその劇の研究を試み、市村羽左衛門氏に七月の歌舞伎役者に支那劇「風橋雪夜渡」を上演するつもりになりましたので、彼地より名譽として「歌」なる十三日夫人人稱し、それに對し、市村氏に「十三日夫人」の六月二十日良人韓康氏及びその一座の「歌」に對したが、夫人は今年十一月、江蘇省揚州の生れ、容姿楚楚然と彫に描いた唐美人のやうな姿で、その舞臺姿は梅蘭芳よりも更に美しいと看はれてなりません。喜劇は「風橋雪夜渡」の愛花旦に扮した十三日夫人であります。

■ 創刊の御挨拶 ■

演藝と映畫の盛んなる今の時より甚だしきはなしといふとも決して過言ではありません。それほどお芝居と活動寫眞とは一般の歡迎を受けるやうになりました。然し月々の數ある芝居と多くの活動とを例へ主なるもの許りにしてもその變り目ごとに或は封切り毎に缺かさず見物するといふことはこの忙しい世の中では到底誰にも出来ることではありません。そこで必然の要求から此頃劇と映畫を寫眞で表はす月刊の畫報が非常に澤山世に出てまゐりました。現在天下に十萬の讀者を有つてをります我が『歴史寫眞』の顧客の中にも、是非さうした種類の寫眞畫報を發行して呉れといふ御要求が此の一二年來矢つぎ早やにまゐつてをりますので、本會に於きまして即ち時代の趨勢に動かされた様な譯で茲に愈々『演藝と映畫』と題する月刊の寫眞畫報を創刊致す事となりました。

『歴史寫眞』が大正二年の發刊以來號を重ねること百五十有餘に上り、その後同誌を模倣し同誌に追隨して生れて來た澤山の寫眞畫報中、その編輯に於て、その製版に於て、果又その印刷に於て常に卓拔優秀の技術を發揮し嶄然頭角を抽出してゐることは周知の事で御座います。今その『歴史寫眞』の姉妹雜誌として『演藝と映畫』を發行いたしますに就きまして、私共は本誌の將來に對して絶大なる抱負と確固たる覺悟とを有してゐるので御座います。即ち現在の『歴史寫眞』が幾多の同類雜誌中常にその先達として輝きつゝあるが如く、今日茲に呱呱の聲を上げました『演藝と映畫』の將來も亦、世上に流布する多くの同種畫報中絶對に比儔を許さないほど燦爛たる光輝あるものにおほし立てたいと考へてゐるので御座います。

創刊號は何分にも勿々の際として萬事に不行届きの個所も多く遺憾な點が尠くありません。然し二號三號と號を重ねてまゐりますにつれ、内容外觀とも一層の洗練と充實とを見ることが出来るであらうと確信いたしてをります。古い諺にも『梅檀は双葉より香ばし』といふことがあります。讀者諸君、此の生れた許りの本誌にも若しその多幸なる將來を卜するに足るだけの何等かの異色ある高い薫りが認められれば何うか此の芽生への稚木にいつまでもお目を掛けて下さるやう只管お願い申上げる次第で御座います。

本號概要

◆ 表紙 ◆

△七代目團十郎の辨慶(表)……國周
△心中 薩摩歌(裏)……(松竹蒲田映畫)

◆ 口絵 ◆

△松本幸四郎氏の明智光秀(オフセツ版)……田中榮光氏筆
△忠臣蔵(三色版)……尾上松之助主演(日活映畫)
△お坊ちゃん(色彩寫眞)……諸口十九氏歸朝第一回作品(松竹蒲田映畫)
△孔雀の光(色彩寫眞)……(松竹蒲田映畫)
△安土の春(色彩寫眞)……(新橋演舞場三月狂言)
△御目見得たんまりと心中宵庚申(色彩寫眞)……(歌舞伎座三月狂言)
△當代人氣俳優の面影(色アート紙)……中村歌右衛門氏父子の舞師の稽古に光る人々(色アート紙)……浦邊榮子嬢と梅村孝子嬢

◆ 寫眞 ◆

△夜叉丸……(松竹蒲田三月狂言)
△いかけ松と第一の接吻……(同上)
△安土の春……(新橋演舞場三月狂言)
△昔鼠小紋……(同上)
△心中宵庚申……(歌舞伎座三月狂言)
△大佐彦七と羽衣……(同上)
△おひらがな盛衰記……(市村座三月狂言)
△大山と家光と法界坊……(同上)
△井伊大老の死……(帝國劇場三月狂言)
△三月狂言拔萃
△大阪中座の三月狂言

◆ 以上演藝 ◆

△鐵腕……(松竹蒲田映畫)
△大楠公……(同上)
△若き女の死……(同上)
△トン／＼柏子……(日活映畫)
△國境を渡る人々……(同上)
△ジョンズの事件……(ユニヴァーサル社映畫)
△心中紅小袖と呪魔装束頭巾……(東亞等持院映畫)
△燃え上る青春と恐怖の家……(同上)
△武家義理物語……(帝キキ映畫)
△怪童丸……(同上)
△歸つて来た英雄と戀愛往來……(東亞及び帝キキ映畫)
(以上映畫) 終

“枕 浪 郎 女 小 多 博”

(言 狂 月 二 十 座 伎 舞 歌)

下の神合で海賊毛劇九右衛門一味の者乗込んだ船から離れ逃れること出来た小町屋惣七は、乞食のやうな身振りをして南多の町にさよひ入り、隠しい小女郎の姿を一目見やうとしてをりまゝ、奥田屋の客主四郎左の情で小女郎と逢ふことが出来た。そこへやがと乗込んだのが毛劇九右衛門一味の者であり、毛劇を解賊と知らぬ小女郎は毛劇に逢つて身掛けの金を無心し、毛劇を引受け、やがと人の想ひと毛劇に逢つて双方驚かされたが、小女郎可哀さうに賊の仲間入りをすることになります。やがと惣七は小女郎共、京都の心算町に仕立てをり、たがに御用手が廻り四日市に近い追分まで惣七に駕籠に乗つたまゝ綱をかけられ、その場で自害いたします。小女郎も同じ縄にかかります。同時に毛劇達も召捕られましたが、時の帝の御即位の御慶びで死刑一等を免れることになりました。



小町屋惣七(後之助氏) 傾城小女郎(松壽氏)

23

“面 對 我 會 壽”

(言 狂 月 二 十 座 南 都 京)

工藤祐三郎が富士の巻物に描かれた役を、御付かり喜び、座主も喜んで清盛を演じてなりました。朝比三郎の取りなしで曾我十郎五郎の兄弟に面合せ、切れて彼れに立ち向ひますが、祐三郎は親の敵と叫んで祐三郎に迫りましたが、曾我十郎は親に制せられ辛くも腕を押し、親め、その時祐三郎は「いゝや空しくは歸すまじ」として、祐三郎の切手を二枚見せ、奥へ富士の巻物に描かれた役を演じての再會が終ります。



曾我十郎祐成(尾治郎氏) 曾我五郎時致(幸四郎氏)

27

“藏 臣 忠 本 手 名 假”

(言 狂 月 二 座 伎 舞 歌)



早野勘平は主人判官の間に於ては、他の振舞、是にお供をいたしてゐながら其處に居り合はます。それこそよの思ふなるお供と申す。お供つてゐたから意度であるといふので何しても切腹して果ててしまふ。早野勘平は主人判官の間に於ては、他の振舞、是にお供をいたしてゐながら其處に居り合はます。それこそよの思ふなるお供と申す。お供つてゐたから意度であるといふので何しても切腹して果ててしまふ。早野勘平は主人判官の間に於ては、他の振舞、是にお供をいたしてゐながら其處に居り合はます。それこそよの思ふなるお供と申す。お供つてゐたから意度であるといふので何しても切腹して果ててしまふ。

腰元おかる（菊五郎氏）

107



185

Kakashi, inc.

◆◆◆ 装 扮 の 後 最 と 氏 郎 二 正 田 澤 故 ◆◆◆

□ (右) 素顔の故澤田正二郎氏 (左) 同氏最後の扮装『赤穂浪士』の堀田半人



新國劇の座長澤田正二郎氏は二月の新橋演舞場に大佛次郎氏原作の『赤穂浪士』を上演中、中耳炎を病み一座の勸告黙し難く遂に本意なくとも舞臺を休み、日本橋區安井醫院に入院、只管療養中でありましたが、同月二十八日より容態急變し遂に化膿性腦膜炎を併發して三月四日午後一時、不歸の客となりました。行年僅かに三十八。氏は滋賀縣大津の産、早稲田大學文學部を卒業して坪内博士の文藝協會に入座したのを振出しに島村抱月氏の藝術座を経て大正六年新國劇を組織し、惡戰苦闘未だ一日も怠ることなく我が新劇壇の先驅者として嶄然頭角を抽んじ、前途の活躍尙大に期待されてなりましたのに、壯業の半ばにして逝いたのは返すくも惜しいことであります。寫眞の右は澤田氏の素顔、又左は今は最後の藝となりたる二月新橋演舞場『赤穂浪士』の堀田半人であります。

“どま引”と“燵の雨時”と“鑑内大満道屋蘆”

(言狂月六座代千八戸神)

中村鴈治郎氏の一座は福助、魁車、長三郎氏等共々神戸八千代座で六月狂言を興行することになりました。鴈治郎氏の神戸出演は久方ぶりの事でもあり特に此月は長くも聖上陛下同市へ初の行幸もあり、神戸全市は挙つてお祭騒ぎの折柄とて、八千代座も連日の大入り續きで、人気は湧き返るばかりでした。演し物は『蘆屋道満大内鑑』と『時雨の炬燵』と『引まど』と何れも鴈治郎氏得意中の得意のもの許りそれに所作事『傀儡師』では長三郎氏の傀儡師と鴈治郎氏の奴とが美しい型を見せました。寫眞の右上は『蘆屋道満大内鑑』の魁車氏の保名と福助氏の葛の葉、中上は『引まど』の魁車氏のおはや、左は『同』鴈治郎氏の十治郎と魁車氏のおはや、又右下及び中下は『時雨の炬燵』の鴈治郎氏の治兵衛と魁車氏の小春であります。



助福) 葉の葛 (氏車魁) 名保『鑑内大満道屋蘆』(上右)
鴈) 衛兵治十『どま引』(左) (氏車魁) やはお (上中) (氏
衛兵治『燵の雨時』(下右) (氏車魁) やはお (氏郎治
(氏車魁) 春小 (氏郎治鴈)



三月の演藝界

歌舞伎座

東西合同大歌舞

伎序幕「お目見得だんまり」一幕
一番目「基盤太平記」一幕、中幕
「大森彦七」二幕、二番目「心中宵
庚申」二幕、大切「羽衣」一幕、
鳥見十郎、大石内蔵之助、八百
屋半兵衛、服部半蔵、高田宗保、
お千、代天津乙女(福助)初瀬、
妻およし、姉おかる、伯了(魁
車) 跡見淺之丞、大石主税(扇
雀) 渡末世時風、武林唯七、甥太
兵衛(鰐十郎) 露者玄伯、道後左
衛門、百姓金蔵(箱登屋) 長谷の
小舟、姑おみれ(蓮女) 鏡右内、
息女千早姫(福助) 娘花野(金太
郎) 道後の臣(純蔵) 母千壽、養父
伊右衛門(松助) 志紀三郎、下男
岡平寅は逸平太、大森彦七、島
田平右衛門(幸四郎)

市村座

一番目「大山と家
光」二幕、中幕「ひらがな盛衰
記」勘當場、二番目「法界坊」三幕
大切「双面」常盤津連中

大山石尊大権現、腰元千鳥、法
界坊、野分姫の雲(菊五郎) 堀三
十郎、母延壽、道具屋甚二(友右
衛門) 徳川家光(娘おくみ) 男女
藏(母おくら) (菊三郎) 夜そば寶
仁六(鶴助) 市橋下總守、横須賀
軍内(伊三郎) 中老八重梅、野分
姫、(福之丞) 綾瀬流平(伊達藏)
御祐筆梅の戸、奴五百平(竹三
郎) 大阪屋源右衛門、園右衛門、
渡し守おかん(鬼丸) 大竹八彌、
梶原平次、大館左馬五郎(彦三
郎) 松平越前之助、番頭長九郎
(紋三郎) 堀太門、しうか、旗本、
道具屋市兵衛(介十郎) 森村勘解
由、梶原源太、手代要助寅は吉田
松若(勘彌)

帝國劇場

新國劇中村吉藏

氏作「井伊大老の死」六幕十場
井伊掃部頭(澤田正二郎) 間部下
總守、金子孫二郎、安藤對馬守
(中井哲) 尾張大納言、宇津木六
之丞(野村清一郎) 松平越前守、
左官利八、齋藤監物(南吉太郎)
水戸前中納言、長野主膳(根岸
若之助) お婿の方久松喜世子「心
中浪華春雨」「三八片輪」「昔模

様鼠小紋「廓花封緘笠」左團次、
松島壽美藏、猿之助、市藏、出演

松竹座

(晝夜) 晝の部「夜
又丸」連獅子「お登代」友徳職

人の家「夜の部」第二の接吻「い
かけ松」壽三郎、成太郎、八百藏、
藤村花柳等東西新舊合同劇
▲邦樂座 「娘見たさに」「ふた
りの留守番」「翌々日の事」「三
人」銀座の買物」曾我廼家五九
郎劇
▲常盤座 (晝夜) 「十六夜清
心」「源平魁つゝ」「高田の馬
場」澤村長十郎、河原崎權十郎
合同劇
▲大國座 梶原華樓一座と新
光劇合同に水野好美出演の三月
興行は一日初日にて狂言は第一
「天保水滸傳」四場、第二、中内
練二氏作「大尉の娘」二場、第三
女鼠小僧「木鼠」

公園劇場

(晝夜) 「仇討甚
子崎」「暗殺事件」、いかけ松「明
石、田中、小川一座

観音劇場

(晝夜) 「細川血
塗磨」「近江源氏先陣館」「明烏」

「連獅子」高麗之助、三十郎、菊
右衛門一座
▲凌雲座 (晝夜) 「忠次と勘
助」坂本紅蓮洞「新説天一坊」劍
星劇一派
▲宮戸座 (晝夜) 「宮島の暗
闘」「良辨杉」「神童矢口渡」おそ
の六三」市之丞、歌門、新之助合
同一座

映画ニュース

▲松竹蒲田スタジオの最近封切映
畫「孔雀の光」には秩父長清及び武
甲山の大深林を利用して大格闘劇
を撮影した。▲小夜子以來暫らく
休業中の栗島すみ子は近く「死の
子守唄」に出演する筈。▲松竹蒲
田のスポーツ正喜劇「運動家」(全
八巻)一日封切、鈴木傳明、英百
合子主演。▲尾上紋十郎主演奇
本映畫「名残の潜血」(全五巻)一
日より封切、同「相撲政五郎」(全
六巻)處女の顔(全五巻)何れも
封切、▲東宝キネマ市川小文治主
演「戦艦装束頭巾」(全六巻)同「艦

病者」(全五巻)封切、▲松竹蒲田
を脱退した勝見庸太郎愈々近く観
音劇場に於て獨立主演、▲日活特
作大映畫「國境を渡る人々」愈々
近く三友館にて封切上映、▲松竹
蒲田の新設大スタジオ(間口十五
間奥行十四間)竣成す▲東宝キネマ
甲陽スタジオに於て「第二の熱情」
「五分間停車」太陽を呑んだ男」何
れも撮影完了す▲ユニヴァーサル
社「ジョンズの大事件」▲獨逸ウ
ファ社傑作映畫「海賊ピエトロ」
(八巻) ▲ワナイブラザース映畫
「疾風亂れ髪」七巻、▲パラマウ
ント映畫「女房凱旋」▲ワナイブラ
ザース映畫「愛人の運路」▲バイ
ダグラフ映畫「不敵の壯漢」▲獨
逸ウファ社映畫「王城秘史」爆彈
亂れ飛ぶ「妖魔の塔」▲トルーア
ー映畫「運命の寶石」(七巻)、
▲パラマウント映畫「眠らぬ街」
▲ビーチャーシー映畫「鐵路に轟く」
▲サス映畫「娘の奇蹟」(九巻)等何
れも近々封切上映

演藝と映画奥附

大正十五年三月廿五日印刷納本
大正十五年四月一日發行

編輯兼 多田 鐵雄

發行人 小澤 成武

發行所 歴史寫眞會

電話 神田 六五七

振替東京 三四八元

東京市小石川區久堅町一〇八

印刷所 共同印刷株式會社

東京市神田區淺師町五

同 市村製版印刷所

定價 一部賣 金六拾錢
(送料共)
繼續讀 金五拾錢
者に限 (送料共)

“ 父 ”
(言 狂 月 八 座 盤 常)

此村の百姓達はお上を始め庄屋五兵衛の貪慾非道に厭せられ塗炭の苦みをしてゐる。百姓太助の倅修助は仲間の内でも學識があり百姓達の牛耳を執つて一致團結上の暴虐に當らうと計畫してゐる。百姓喜十は、省の者を裏切つてお上に内通する。庄屋五兵衛は己れの土地を殖す爲めに軒別二十日づつ無賃の働きを強要して百姓等に沼地を埋めさせてゐる。修助は一同を代表して城代に款願に行つたが、城代は庄屋の申付けは拒絶しても好いが下は七つの子供から上は七十の老人に至るまで人別三文の日銭を納めろと申渡した。百姓の憤激は其極に達し、氣早やの勘五郎は庄屋五兵衛を締め殺してしまつた。かくて鬱積した方は爆發し百姓一揆が起つた。城方の精銳は間近に進んで來、忽ちその重立つた者は捕へられた。修助も縛られた。血みどろになつた太助も捕はれた。太助は「あゝ百姓、百姓の力」と連呼しつゝ莞爾として息が絶えた。



口百姓太助(井上正夫氏) 倅修助(長十郎氏)